

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 30日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010-2012

課題番号：22530916

研究課題名（和文） 現代大学生の留学志向に関する国際比較研究

研究課題名（英文） International Comparative Study on Attitudes and Behaviours of University Students towards Studying Abroad.

研究代表者

河合 淳子 (KAWAI JUNKO)

京都大学・国際交流推進機構国際交流センター・准教授

研究者番号：70303922

研究成果の概要（和文）：日本、中国、タイの研究型総合大学で大学生を対象に留学志向に関するアンケート調査を実施、分析した。主な研究成果は、(1) 3か国4事例共に学生の留学志向には三層（積極層、浮動層、消極層）が存在すること、(2) 三層の比率には3か国間で差が見られ、特に日本の2事例では浮動層が過半数近くを占めること、(3) 留学志向の形成に影響を与える要因には3か国間の共通点（外国語運用能力、大学教育環境）と相違点（家庭背景や幼少期文化体験の影響の強弱）があること、が明らかになったことである。

研究成果の概要（英文）：Drawing on surveys from students at research-oriented universities in Japan, China, and Thailand, this study presents the following main findings: (1) In all cases, at four universities in three countries, students can be categorized into three groups with regards to their attitudes and behavior of studying abroad, namely “positive,” “negative” and “floating” groups. (2) Distribution of these three groups varies among cases; one of the distinct characteristics of Japanese students is that the majority of students are categorized into the “floating” group, while this cannot be observed in other countries. (3) There are common factors that influence formation of students’ attitudes and behaviours toward studying abroad in all cases; foreign language ability and the educational environment of a university have positive impacts. At the same time, there are differences regarding factors and degree of influence in each case; these are students’ family background and early childhood cultural experiences.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1700,000	510,000	2210,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：比較教育、国際教育

1. 研究開始当初の背景

2008年7月に中央教育審議会の大学分科会により「『留学生30万人計画』の骨子」取りまとめの考え方に基づく具体的政策の検討」が発表され、そこには「『留学生30万人計画』は…(中略)…海外からの優秀な人材を受け入れるばかりでなく、大学等間交流の活性化や世界で活躍できる優秀な日本人の育成の観点から相互交流も重視すべきであり、日本人の海外留学の促進も重要である。」との記述が見られる。それまでは、留学生政策といえば、海外からの留学生の受入れに力点が置かれていたが、この頃から、自国学生の海外留学を促進し、留学生の受入れ増を図ることを通じて双方向の交流を活性化し、大学全体として教育研究環境を充実させようとする発想へと転換が図られてきたといえる。

実際に大学教育の現場で「日本人学生の海外留学の促進」を図るには、その基礎となる研究や根拠となる調査が必要である。しかし、未だ多くの研究課題—なぜ大学が自国学生の海外留学と学生間交流の活性化を図る必要があるのか(理念・目的の問題)、そもそも学生はどのような留学志向を有しているのか(実態の問題)、具体的な促進策とはどのようなものか(方法の問題)、効果を如何に測るのか(評価の問題)等々が残されており、十分に研究されていない。特に学生自身がどのような留学志向を有し、その志向がいかなる要因によって影響されるのかという実態の解明は、本領域の理論的発展や制度構築の上で欠かせないにもかかわらず、研究の蓄積は乏しかった。さらには、ある国・地域の学生の留学志向の特徴を明らかにするためには、国際的な比較研究が有効であると考えられるが、そのような比較研究はほとんど見られない状況であった。

2. 研究の目的

そこで、国際的な比較を通して、我が国の大学生の留学志向の特徴を明らかにすることを目的に本研究を行った。

本研究を実施する以前に行われた日本のある研究型総合大学における調査では、すでに以下の2点が指摘されていた。

(1) 留学志向の三層構造の存在：日本人学生の留学志向には一定のグラデーション、すなわち留学志向の強弱による段階的なグループが存在する。それらのグループを、「積極層」「浮動層」「消極層」と名づけ傾向を見ると、全体の15%前後が積極層、50-60%が浮動層、20-30%が消極層という傾向が一貫して見て取れること。

(2) 大学内要因の留学志向への影響：学生の留学志向には、大学内要因(外国語運用能力

の自己評価、留学生との交流に対する意識、留学経験の蓄積等)が大きく影響していること。

ここで本研究の出発点となる研究課題が浮かび上がってくる。すなわち、先行研究における上記の分析結果がこの大学の学生に特有のものなのか、あるいは日本の大学生に一般化できるものなのか、という点である。日本全体への一般化は困難にしても、研究型総合大学に所属する学生の特徴といえるのだろうか。こうした日本人学生の特性を追究するためには、国内での他事例の検討と共に、海外において類似の特徴を持つ大学を対象として、国際的な比較研究を行うことが効果的且つ重要である。これまでの調査で見られた留学志向の特徴は、アジア諸国の研究型総合大学で確認できるのであろうか。

3. 研究の方法

(1) アンケート及びインタビュー調査

中国とタイの研究型総合大学を選び、日本で既に行なわれていた質問内容を翻訳、300-400人程度の規模でアンケート調査を行った。タイにおいては学生の意見のより詳細な把握を目的に、インタビュー調査も行った。

両国を選んだ理由は、地理的にアクセスしやすいうことに加え、多くの留学生が世界に向けて送り出され、学生の海外留学に関して様々な側面が存在すること、また複数の研究型総合大学を有する点で日本の状況との類似点が見られること、さらには研究協力者の全面的な協力が得られたことである。

以上の調査で得られたデータを用い、日本の事例に見られた上記の2. (1)留学志向の三層構造が存在するのか、2. (2)留学志向に影響を与える要因はいかなる要因であるのかについて検討を行った。

国内においても研究型総合大学一校の協力を得て、アンケート調査を行った。これにより、日本の2大学(別に行われた1大学での調査を含む)、中国1大学、タイ1大学のデータを得た。これらの調査結果を、統計処理ソフトSPSSを用い、単純集計、 χ^2 乗検定、分散分析等を用い、分析、考察した。

(2) 各国の社会経済的状況に関わるデータ収集と考察

アンケート、インタビュー調査に平行して、最近の世界各国における留学をめぐる状況、すなわち各国における自国学生の送り出しと外国人留学生の受入れの状況について統計、資料を収集し、整理を行った。この作業と上記(1)で得られた成果を相互に検討することにより、留学の世界的な潮流の中に各事例を位置づけることを試みた。

4. 研究成果

3. で述べた国際的な比較研究を通して、国内での分析では十分に把握できなかった大学生の留学志向の特徴がより明確に捉えられることとなった。現在までに、主に以下の(1)~(3)が明らかになっている。

(1) 学生の留学志向の三層構造

日本、中国、タイ共に学生の留学志向には層化構造(積極層、浮動層、消極層)が存在することが明らかになってきた。この三層は、「留学したいと思ったことがあるかどうか」という学生たちの「意識」と、「留学に向けて準備をしているか」という「行動」の二側面に注目して行った分類である。単に意識のみに着目したものではないということを強調しておきたい。

留学志向の三層を分析枠組みとして用いることで、多面的に学生の留学志向を理解することが可能となった。

(2) 留学志向の国際比較

中国(中国C大学)、タイ(タイT大学)、日本(日本A大学及び日本K大学*)の3か国4大学の事例それぞれについて、三層の比率を表したものが次の四つのグラフである。

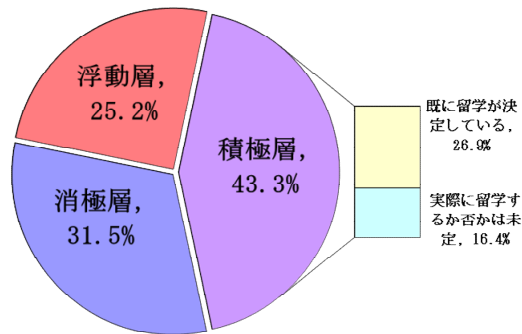
- 積極層、浮動層、消極層の比率を見ると、日本、中国、タイ各々の特徴が見て取れる。
- ① 日本の二事例では三層の比率が似通っており、特に浮動層が約半数を占めていることが一つの特徴といえる。
 - ② 中国とタイの事例では積極層が半数近くを占めている。日本の場合は、10%-15%となっている。
 - ③ 中国の事例では、積極層の約半数が「既に留学が決定している」と答えている。
 - ④ 中国の事例では、消極層も約30%存在している。
 - ⑤ タイの事例では、消極層が非常に少ないことが一つの特徴といえる。

以上の結果から、特に①に注目したい。これは、本研究の目的で述べた研究課題に直結する分析結果である。すなわち、過半数に近い浮動層(「留学したいと思ったことがある」が「何も準備をしていない」)の存在は、日本の研究型総合大学に所属する学生の一般的な特徴であることが、これまで以上に強く示唆された。

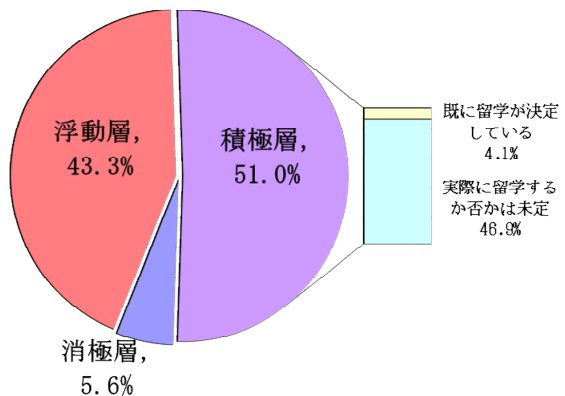
※なお、日本K大学のデータは、IDE大学セミナー講演資料(河合, 2011)及び「京都大学における国際交流の現状と新たな展開への視点: 第4回アンケート・インタビュー調査報告書」(京都大学国際交流センター, 2012)に拠っている。

図1: 留学志向の国際比較
(中国・タイ・日本の事例)

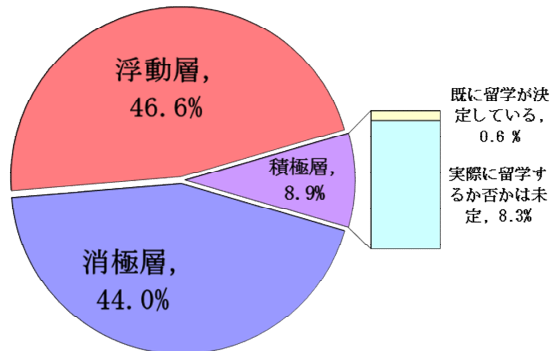
中国C大学 (N=409) 2010年実施



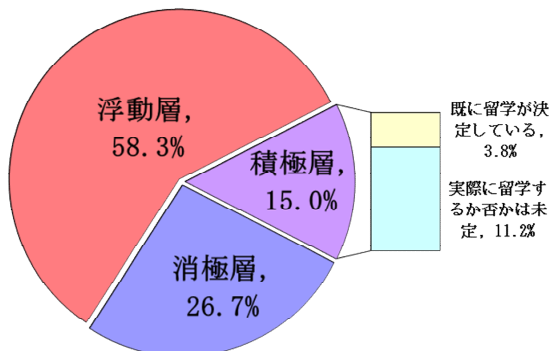
タイT大学 (N=358) 2012年実施



日本A大学 (N=350) 2010-11年実施



日本K大学* (N=580) 2011年実施



(3) 留学志向の形成に影響を与える要因

留学志向と関連が予想される要因を大学内要因、大学内外要因、大学外要因の三種類に分類し、留学志向との関連を分析した。大学内要因は、大学のサポートや大学入学後の本人の努力によって変化が期待できる要因、大学外要因は、大学のサポートや大学入学後の本人の努力では変えられない要因、そのどちらにも特定することが難しいものを大学内外要因とした（野口、河合 2010）。

① 3 か国 4 大学にみられる共通点

3 か国 4 大学間でかなり共通点が多いことが判明した。3 か国 4 大学間に共通する傾向は以下の 4 要因が留学志向に関連する点である。①「日常的外国語運用能力についての自己評価」、②「学術専門的な外国語運用能力についての自己評価」③「留学生との相互作用から受けた影響」④「幼少期文化体験（直接的）：外国メディアとの接触頻度」である。

4 大学のうち 3 大学で共通する要因は、(i)「これまでの海外経験（留学）」[K 大学、A 大学、中国 C 大学で有意]、(ii)「世帯収入」[K 大学、中国 C 大学、タイ T 大学で有意]であった。

4. (2) で見た通り、三層の構成そのものには 3 か国 4 大学で差があるが、より積極的な層に属する学生の特徴は、3 か国 4 大学において似通っていることが分かる。また、上記①～④及び (i) (ii) の六要素のうち、①～③と (i) の四要素は大学内要因である。すなわち、大学の取り組み次第では海外留学促進が可能なことが示されている。

② 3 か国 4 大学に見られる相違点

現在の大学生活に対する満足度と留学志向の関係について述べておく。3 か国 4 大学とも「満足している」と答える学生が 7 割程度を占めているため、その中での微妙な多寡の比較になるが、日本 K 大学では、留学に積極的な者ほど、現在の大学の講義、指導教員に対する満足度が低い。一方、中国 C 大学では、留学に積極的な層には、学生生活、知人友人関係に対する満足度が高い者が多い。

次に、両親の留学経験の影響である。日本 A 大学、K 大学ともに留学志向と強く関連が出ており、特に父親の留学経験と本人の留学志向にはプラスの関連が見て取れる。しかし、ここで指摘しておきたいのは、K 大学で行われた三年前の先行調査結果である。2008 年に行われた調査では、両親の留学経験、世帯収入の影響は見えて取れなかった（河合編、2013）。この変化が実際に存在するものなのかどうかは、厳密なランダムサンプリングをおこなってないこともあり、今後の検討に委ねるが、より一層の時系列的なデータの蓄積が必要であることは確かである。

以上の成果は、2012 年度末に刊行した研究成果報告書に詳しい。

本研究の意義は、理論的なレベルと留学支援策への貢献という実務的なレベルで存在する。まず、理論的なレベルでは、留学の主体である学生を直接の調査対象とし、「教育をめぐる世界的な人口移動（すなわち留学）」現象の性質を明らかにするための、日本及び中国、タイの 3 か国 4 事例の蓄積を成しえた点である。今後、それぞれの事例をさらに詳細に分析し、その背景を明らかにすることを通じて留学研究の理論的発展に寄与することができよう。次に、実務的には、高等教育機関が学生の海外留学促進策を検討する際の基礎的データを提供できた点である。本研究期間中に本研究成果を根拠の一つとした短期留学プログラムを開設したという実践的成果もあった。

本研究期間においては対象地域をアジアに限定してきたが、将来は調査対象地域を欧米にも広げ、研究をさらに発展させていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

- ① 韓 立友、河合淳子、「日本の大学における留学生受入れ体制の問題点及び解決策の探索—京都大学におけるアドミッション支援オフィスの導入の背景と効果」『論攷』、査読有、第 2 号、京都大学国際交流センター、2012 年、pp. 36-57
http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/154812/1/Ronko2_037.pdf
- ② 河合淳子、「大学における学部学生の留学促進」、『留学交流』、査読無、5 月号、Vol. 2、日本学生支援機構、2011 年 pp. 1-12
<http://www.jasso.go.jp/about/documents/junkokawai.pdf>
- ③ 河合淳子、韓 立友、孔 寒冰、「大学生の留学志向と社会的背景—日中比較を手がかりとして」、『論攷』、査読有、第 1 号、京都大学国際交流センター、2011 年、pp. 1-20
<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/139273>
- ④ 河合淳子、「大学生の海外留学に対する意識と行動—京都大学と浙江大学（中国）の比較調査から」、『教育と医学』、査読無、第 59 巻、2 号、慶応大学出版会、2011 年、pp. 78-86

[学会発表] (計6件)

- ① (Chair) Junko KAWAI
(Presenters) Junko KAWAI, Han-bing KONG, Chomnard SETISARN, and Yuko NUKITA, Parallel Session, “Attitudes and Behaviours of University Students towards Studying Abroad and Institutional Policies: A Case Study in Research-oriented Universities in Japan, China, and Thailand”, Asia-Pacific Association for International Education (APAIE), 2013 March 11-14, hosted by The Chinese University of Hong Kong, March 13, 2013. 11:00-12:30, Room 201A, Level 2, AsiaWorld Expo, Hong Kong 査読有
- ② 河合淳子、「学生調査にみる京大生の留学志向及び主に学部生を対象とした全学レベルでの留学促進の取り組み」、ITPシンポジウム現地語セッション、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科、2011年12月3日(土)、京都大学稲盛財団記念館
- ③ 河合淳子、「大学生の海外留学志向～日中の研究型大学学生の比較を手がかりに～」、IDE大学セミナー、IDE大学協会近畿支部、2011年8月26日(金)、京都大学楽友会館
- ④ 河合淳子、「高度人材の留学移動の規定要因に関する研究—日中比較を手がかりとして」、日本比較教育学会第47回大会、2011年6月25日(土)、早稲田大学
- ⑤ 河合淳子、「『国際化と教育』実態と幻～留学現象からみる～」、第22回筑波社会科学会、2010年7月17日(土)、筑波大学(東京キャンパス神保町地区)
- ⑥ 野口 剛、河合淳子、「留学志向の規定要因に関する比較研究—日中の研究型総合大学学生を事例として—」、日本比較教育学会第46回大会、2010年6月27日(日)、神戸大学

[図書] (計1件)

- ① 河合淳子編、「現代大学生の留学志向に関する国際比較研究(科学研究費補助金基盤研究C 課題番号22530916 平成22年度-平成24年度)研究成果報告書」、2013年3月、201ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河合 淳子 (KAWAI JUNKO)

京都大学・国際交流推進機構国際交流センター・准教授

研究者番号：70303922

(2) 研究分担者

黄 順姫 (WHANG SOON-HEE)

筑波大学・人文社会科学研究科(系)・教授
研究者番号：50199147

(3) 連携研究者

韓 立友 (HAN LIYOU)

京都大学・国際交流推進機構・特任准教授
研究者番号：40521977

研究協力者

野口 剛 (NOGUCHI TSUYOSHI)

京都大学・教育学部・研修員

貫田 優子 (YUKO NUKITA)

大阪大学/近畿大学/京都精華大学・非常勤講師

孔 寒冰 (KONG HANBING)

浙江大学(中国)・公共管理学院・副教授

シティサン チョムナード

(SETISARN CHOMNARD)

チュラーロンコーン大学(タイ)・文学部東洋言語学科・助教